語りきれなかった思い

― 学長選を終えて ―

井　坂　　聡

相模女子大学での教員生活がスタートしたのが2015年、この年度末でちょうど９年となる。その間に行なわれた３回の学長選挙の全てに候補者として推薦をいただいたが、ご承知のように３戦全敗。ある意味、相模女子大学の歴史に名を刻んだかもしれない。まあ、政治家と違って選挙に負けても教員の職を失うわけではないのでその点は気が楽だが、さすがに落選続きは少々オモシロクナイ。そこで、選挙公報や所信表明では語り尽くせなかった、私が学長になって何をしようとしていたのかを書き記しておこうと思い立った。とはいえ、あまり長々と書いても引かれ者の小唄になってしまうので、①すぐに出来ること②頑張れば出来ること③時間はかかるけどやらなければならないこと、の３点についてごく要点だけ触れるに止める。

①すぐに出来ること＝全員女性の副学長

適材適所の考えに従えば男女に拘るのはおかしいという議論があることは承知しているが、事務方に比べて教員側の役職者の女性比率は圧倒的に低い。これは意識的に変えていかない限り改まらないし、能力のある優秀な女性教員は沢山いる。さらに全員女性の体制を整えることで本学の「本気度」を内外に示す絶好の機会であり、戦略的にも重要であることは間違いない。

そこで私は学長になったら、副学長の３名は全て女性教員にお願いしようと考え、総務担当、教育担当、研究・情報担当それぞれに意中の人がいた。もちろんその方たちに話をしているわけではなく私の一方的な片思いであるが、実現していれば正に「適材適所」の人選であったろうと自負している。

②頑張れば出来ること＝学園全体と地域の連帯を深めるミュージカル『くるみ割り人形』

この構想は、最初に候補に挙げていただいた2017年の選挙の際にお示ししたものであるが、今でもこれは是非実現させたいと思っている。

構想の出発点は、ホフマンやデュマ、チャイコフスキーには大変無礼な物言いであるが、ストーリーを気に入ってというより、年代性別問わず、それぞれの興味・関心に応じて参加できる要素が沢山ある作品であるということにある。本学に通う層だけでも幼稚園から大学院までと幅広い。そこに教職員、地域の方々も加わって、参加者全員が自分の役割を楽しめる設定が必要なのである。

先ず、出演者を沢山用意できる。ご存じのように踊りの場面では色々な国や地域などが出てくるので、それに合わせて幼稚園や小学生の子どもたちを幾つかのグループに分けて踊ってもらうことが可能である。もちろん中学生以上の大人の出番もふんだんにある。ミュージカルなので音楽の演奏も欠かせない。

一方、スタッフ側にも様々な仕事がある。上演台本の作成、お芝居の演出、ダンスの振り付け、歌唱指導、衣装の制作、髪型やメイクのデザイン、背景画の制作、小道具持道具の制作、照明、音響など直接舞台に関わるものを始め、スポンサー集めや地域の方々との協働体制の構築などの企画･運営活動、ポスターの制作、SNSでの発信、グッズ作成などの広報・宣伝活動、さらにはコラボ企画として、例えば物語にちなんだ国々（もちろんそれ以外も可）の料理を提供する模擬店が並ぶフードストリートの実施など数えきれない。そして、こうして並べてみるとお分かりいただけるように、本学の各学科の学びを実践に活かせる要素が散りばめられている。

これを実現させるためには相当なエネルギーと時間を割く必要があり、恐らく準備から上演まで一年がかりのイベントになるだろう。その間にかなりの負担が生じることは確かである。であるので毎年こんなイベントを行なおうというわけではない。しかし折角、幼稚園から大学院まで揃っているのに縦の交流の機会が中々ないのが本当にもったいないと私は常々感じている。また、日頃本学の学生と接する機会が多い市の職員の方々と話していると、学生たちの魅力を嬉々として語ってくれる。その環を地域にもっと広げていくには短期間のイベントではなく、ある程度時間を掛けて関係性を構築する必要がある。試練を上げればきりがないが、それを乗り越える力を示すことができれば、相模女子大学にとって大きな財産となることは間違いない。

③時間はかかるけどやらなければならないこと＝学部学科の再編

最初に述べたように私はまだ９年しかこの大学で過ごしておらず、学部学科再編を口にするなどおこがましいとお叱りを受けるかもしれないが、中に浸りきっていては見失っていたり、或いはしがらみにがんじがらめになって発想の柔軟さを失っている可能性もある。その結果、増改築を重ねてきた建物が迷路のようになってしまって、受験生にとって分かりにくくなってやしないか、というのが私の危惧である。ここは傍目八目、何の遠慮もなく私なりの学部学科の再編構想を記したい。

学部構成としては現在と同じく３学部を考えているが、その内容は大きく変わる。ここ近年の大学の方針として教員養成を重視していることから，現在の学芸学部を教育学部寄りにシフトしていく。学科としては日文、英文、子ども教育に加えて健康教育学科を設立して、体育教員養成を健康栄養学科から移行する。心の健康教育という面から人間心理学科とのコードシェア科目も必要になるだろう。

次に、人間社会学部を名称変更して人間創造学部とし、社会構想学科、文化創造学科、人間心理学科の３学科を設置する。社会構想学科は現在の社マネを軸に英文の観光学関連を移行し、地域との関わりを重視した特色を出していく。文化創造学科はメディア情報、生活デザインと、日文、英文、社マネにある映像科目などを集約して、クリエイティブ系の学科に再編し、学科内にコースを設定して興味に応じた履修ができるようにする。人間心理学科は大きな変更は行わない。なお、現在の人間社会学部に設置されている社会福祉士課程については、社会構想学科と人間心理学科でカバーしていくこととする。

栄養科学部と短期大学部については教員養成の部分を除けば、学科の特色や役割分担がはっきりしているので、大きな変更を行なう必要はないと考える。

その他に重要なこととして、今の『さがみ総合講座』を見直して、18歳成人に必要な一般教養を体系的に修得させるために、哲学・倫理学・法学・経済学を主軸とした全学の必修授業に再編成するべきではないかと考える。英語の必修化についても議論を進めるべきだろう。

書き出すときりがなくなるので、この辺りでやめておくが、これらのことは常に使ってきたキーワード「学園を知のテーマパークする」に密接に関連する事なので、今回の学長選の抱負の文章を締めくくりに再掲したい。

『知識を得ることで可能性に満ちた心豊かな生き方を見つけられる。学生ひとりひとりがそう思える学びの場にこのキャンパスをしたいのです。

駅に近い自然豊かな広い敷地という物理的環境、個性豊かなキャスト（教員）という人的環境、テーマパークに欠かせない条件は整っています。であれば後は『テーマ＝教育の目標』をはっきりさせること。それが学長の仕事です。

私の考える教育の目標は「少々の荒波でも、しなやかにたくましく漂える人」を育むことです。人生の浮き沈みの中で「溺れない」心根をどう育てるのか。一つは性別・年代・職業・地域性といった差異を肌身で感じる体験を増やすこと。地域協働活動の拡充です。もう一つは私たち自身が良きロールモデルとなること。教員に魅力がなければ学生たちへの説得力は生まれません。教員が活き活きと教育・研究活動を行う環境を作ることも学長の大事な使命です。

二十年後を見据えて、色褪せることのない『テーマパーク』を構築する土台を築く三年間にしたい。それが私の抱負です。』

特集内の拙稿も併せてお読みいただければ、幸いである。